

---

・ 「 PHN （ 思想 ・ 人間 ・ 自然 ） 」 第 5 0 号

（ 2 0 2 1 年 1 2 月 ） （ Web 版 ）

---

・ 「 PHN （ 思想 ・ 人間 ・ 自然 ） 」 第 5 0 号 記念 特別号

・ 江渡狄嶺 「 場論研究会 」 発足 8 0 年 記念

---

・ 江渡狄嶺 著 「 農乗家鬘 ・ 牛欄寮 講義案農乗図録

を出すについて 」 〔 影印版 〕

・ 「 二宮尊徳 ・ 安藤昌益 にデジケート 」 した論考

〔 江渡狄嶺 著 『 地涌のすがた 』 より 〕

---

.....

・【はじめに】

・〈場〉の思想家・江渡狄嶺（1880～1944）が、「場論研究会」を始めたのは、昭和16年6月のことである。その年の12月には、太平洋戦争がはじまる。したがって、今年〔2021年〕は、太平洋戦争開戦80年であると同時に、狄嶺の「場論研究会」の発足80年のとりにあたる。

・その戦乱のさなかに、狄嶺は「場論研究会」を3年間にわたっておこなっている。その内容は、『場の研究』（江渡狄嶺著作集、第一巻、昭和33年刊）に収録されている。しかし、その難解を極めるところの『場の研究』の解説作業は、狄嶺の直弟子たちも困るほどのものであることは、夙に知られている。

・狄嶺の『場の研究』を、理解するための糸口は、狄嶺の第三著作『地涌のすがた』（青年書房、昭和14年刊）の中にある。

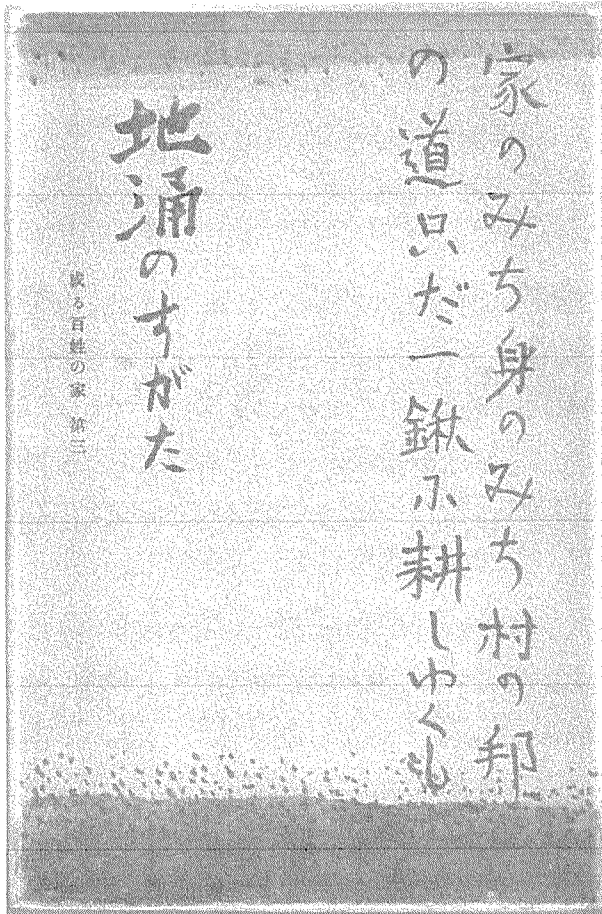
・しかし、今日、その『地涌のすがた』も極めて入手が困難である。そこで、このたび、この中の論考である「講義案農乗図録を出すについて」（安藤昌益にデジケートしたもの）の「影印復刻版」を作成し、江湖に公開することにした次第である。

・なお、「講義案農乗図録を出すについて」を読むための参考文献としては、拙著『場論的世界の構造—江渡狄嶺の哲学』の「第一章 『百姓はかく考える』—『行』と『場』の思想の確立」を参照願いたい。

2021年12月25日

和田耕作

・ 狹嶺の『地涌のすがた』は、「単なる思想の書には非ず、人生の座右の書なり。」



・〔江渡狹嶺著『地涌のすがた』、表紙、昭和14年、青年書房刊〕

・ 装幀 = 津田青楓

・〔和田文庫蔵本より〕

・〔PHNの会 (C)、無断転載厳禁〕

・ 現代は、〈場〉の哲学の時代である。 〈場〉の哲学の先駆者・江渡狹嶺 に学ぶ！

- ・ 〈場〉の哲学は、「人類的精神」＝「世界人類哲学」である。
- 

- ・ 江渡狄嶺 著 「農乗家鬘・牛欄寮 講義案農乗図録を

出すについて」〔影印版〕

prolegomena zur Agrayana überhaupt —

日本が生んだ世界最大の農夫 及び その最も徹底した  
思想家として 二宮尊徳翁 及び 安藤昌益大人の靈に  
この輯を捧ぐ。

---

「場」といふことをよく言ふのですが、私がすつかり落着いたのは「場」といふことが分つてからです。教育の方から言へば、教育の「場」といふことをはつきりすれば、その教育の原理はどこでも常態なる。さういふ觀點から言へば、農村教育といふものは別にあるわけではなく、農村の時は農村、都市の時は都市で考へられるのですが、マア、さうした教育論は今別として、たゞ教育さるゝ上の希望だけを述べるとすれば、私としては本當の百姓にして貰へばそれでいゝ。本當の百姓は今の三つの定義を備へたものが、本當の百姓だと思ひます。さうすれば神様の子にならなくとも聖人にならなくとも、百姓は百姓で唯我獨尊でいゝと思ひますが、それが百姓にならなければならないから、の衣を着なければ安心が出来ないのだと思ひます。

問 私は最近「なりきる」といふ氣持を考へるのですが、本當の百姓にならなつてしまふ氣持、それが普遍的ですね。

答 さうです。百姓は百姓になりきる。外の仕事の人はその仕事になりきる。それでいゝのです。——只空気に取も肝心なことで注意しなければならぬことは「なりきる」と言つても、ならうとしてなり切つたのではそれは駄目です。本來なつてゐるものだからそこを分つて「なりきる」なのです。こゝはよく人の間違ふところです。

私も六十歳になつたら、百姓の教育をしようと思つてゐるが、或は、近い内に始めるかもしれない。それは自分の今まで話したやうなところから、しつかりした百姓をつくつてゆきたい爲です。

## 一、農乘家塾 牛欄寮 講義案農乘圖録を出すについて

preliminum zur Agrarwissenschaft —

日本が生んだ世界最大の農夫及びその最

も徹底した思想家として二宮尊徳翁及び

安藤昌益大人の靈にこの輯を捧ぐ。

○

未だ嘗て爲されなかつたことが、未だ嘗て試みられたことのない手段に依らな  
いで爲され得ると期待するのは不健全な空想であり、自家撞着であらう。

ペーヨン

○

私が、農乘家塾牛欄寮を創めて、私の家機農乘學を提議するに當り、何等かのテキストが必要なら  
やうに感じた。それは普通の講本といふやうな意味からばかりではなく、私の建前は、これ迄の物

の見方、考へ方、まとめ方に、一方では、所謂コペルニカスの轉廻を與へたつもりであり、又、他方では、これ迄のそうした考へ方、見方に夫々に適當な根據理由を供し得るものとして、私が四十四五歳にして初めて到達し、決定し、安んじ得た全然新しい立場にある提論だと考へてゐるのである。従つて、聞く方でも、何等かのそうしたテキストがないと、これ迄の多年先入な考へ方と、まとめ方との混乱から大變困ららしいし、さればといつて、右にいつたやうな次第であるから、過去現在一切のものに、それ一つとして全部的にその提論の臺本に、——不充分といふ意味ではなく、根本的に逆立關係にあるの意味で、——役立つものはない。無論、人類が長い間に考へたものは、總て皆我等の貴い遺産であつて、私がそれを尊重する點に於ては決して人後に落つるものとは思ふてゐない。だが、それ等は、如何に尊重すべきものとしても、私の場合としては、結局部分的に助證せらるべき性質のものであつて、決してそれが正依としての何物でもないといふだけのことである。助證としては、それは出来るだけ何處までも擁護されたい。現に、私自身としても、それ等に對しては渴者の飲に於けるが如き熱意さへ持つてゐる。で、この場合は、それは All or nothing ではなく All and nothing である。それで、私のかうした建前から、それ等一切は、無論私個人ばかりでなく、各人それぞれの「場」に（主觀的な立場とは間違はないやうに）立つての悟達と經驗によつて、各人それぞれの「場」の解釋になる獨自な學問的著作を作り上げべきがポイントなのである。然し、牛飲水成乳、蛇飲水成毒、その然る所以の那邊かをばハツキリと知るが肝腎だと同じ

50

時に、我等の思想、行動は、三猿主義ならまだしもいやが、廣くも深くも、見ざる聞かざるであつて、口だけはいはざるにあらざる獨斷偏見の獨りよがりではいけない。只だ私共は私共のその「場」から、その本末だけはハツキリとしておこなうては到底蕩として呼かぬはなからうといふことわけなのである。

この根本的な私の考へ方、態度と、それと同時に、私の教育觀の根本の一つとして、私は教育は、絶対にといつても人間で出来るだけの教ゆるものやその外の、個人的、一方的なイデオロギイや結論を注入すべきものではないと聞く信じてゐる。無論、私は、私としての結論を持たないことはない。然し「余は教へず、余は語る」モンテスマのこの言葉を、私はうれしむものに思ふ。教育者は、「善良で忠實な後見人」であつていふ。教育正當は、只だ、出来るだけ止見の場に立つての、各人自身の足によつて歩み、頭によつて考へ、手によつて働き得べき正しい方法と行の眞偽とを開示悟入し、そして、現在ばかりではなく、過去と將來をも生き得る人を入らしむべきものである。即ちその方法教法（教授）の眞髓としては、その教育正當のあるべきやうに、「教育の場」と、その場の又の場とをハツキリとして、其處にたがひある所與を選擇し、配列し、具案して、それを手がけ、むすびつくるその人々のことわけまなびの相須ち、相長する發達の五つつのWのはたらきであるべきなのである。而も、これは獨り教育とのみいふではない。千古萬古を通じての眞實な哲學的精神、科學的精神、否、人類的精神そのものでなくて何んであらう。最深最高の

51

- ・ 哲學的精神・科學的精神・人類的精神 に學んだ江渡狹嶺
- ・ 「場論」は、物の見方、考へ方のコペルニカスの轉回である。
- ・ 〈場〉の哲學は、「人類的精神」＝「世界人類哲學」である。
- ・ 人類の知的遺産のすべてに學んだ狹嶺。したがつて、「〇〇と狹嶺」という論考を書くことはたやすいことである。しかし、それらはいくまでも「助証」に過ぎない。私たちは、狹嶺の〈場〉の哲學のオリジナリティーをしっかりと理解し、そこからさらに現代の「世界人類哲學」の創造に向かうことが求められるのである。
- ・ この文章に関連する内容の記述が、『場の研究』の「第19章 場の考へ方のコペルニカスの轉換」にある。ここでも、まず安藤昌益・二宮尊徳・佐藤信淵・田中正造の四農に學ぶべしと書かれている。「助証」（ものごと）に対するものは、「正衣」（ありどころ）である。同時に、「ものごと」と「ありどころ」の關係は、縦と横の關係である。これを教育において、あてはめると「ものごと」は「教材論」であり、「ありどころ」は「學校論」である（『場の研究』、p183参照）。
- ・ 次に、読むべきは、『場の研究』の「第6章 ありどころの學」（pp67～79）と「第7章 ありどころの教」（pp79～83）である。
- ・ この「ありどころの學」の内容解説については、拙著『場論的世界の構造—江渡狹嶺の哲學』の「第6章」の「4 『ありどころの學』とは何か」（pp241～245）を参照されたい。

教育の眼目は、實にこの人類的精神を各人の衷に啓發するものでなければならぬ。それ以外の單なる智識、技能の習得といふが如きものは、蓋し、教育正當に非ずして教育テクノロジーである。況んや又、多くの人造人間の教育、睡眠劑的教育の邪道に於てをや。而してこの教育觀は、上述の根本的な私の考へ方と同時に關聯である。尙ほ、この當然な推論として、教育の基礎は、先づ、ことばまなびの學文であるよりは、繰り返していふが、ことまなびの學事ではなくてはならないものである。(これは私の學識、眞論とも密接な關係のあることだが、茲には略す)——現在の牛欄寮は、かうした私の教育觀、教育事實の發展の徑路としては過去二十數年來の、少年詩園、無形塾、單校教育理念といつたものとして長く跡づけられ來つた一つのむすびであるといつていい。

この二つの理由は、好んで自らの異を立つるではないが、止むを得ず、私の提議に特別なテキストの必要を感じしめたのである。そこで、次にこのテキストの圖録形式について一言させてもらはう。

私は、私の家穠農乘學の大綱だけでも何とかして書き上げたいと、この十數年考へ、又、努めてもゐる。だが、物質的にも時間的にも全然餘裕のない私の現在の生活として、それは仲々に困難である。で、フット副餘に思ひついたのがかうした圖式である。無論かゝる圖式を繰り上げるにも相當な苦心と時間はかゝる。然し、書くといふ説明形式よりはかうした圖式的な直觀形式の方は、私としては、まとめる上には多少の無理があるとは思ふが、まとまつたものとして見る上からいへば

52

大體具合がいゝし、同時に、私の事情としても少しは樂なのである。只だ、これはこのまゝだけでは、私以外の何人にも通用出來ない理由のものであらう。恰も、私の好きなトエフェルスドロックの契のやうなものかも知れない。それはもと／＼かゝる表現は私の直觀形式であつて、他には更にその説明形式を待たなければならぬものだからである。而も、その説明形式は、今のところ、書くよりはこの圖式を底本として話した方が私の都合上好ましいことなのである。従つて、私の提議のテキストとする分には、類がなく奇は奇だが、一向差支へなく思はれる。案では、掛圖式のものも考へてゐる。尙ほ又、後日私がその説明形式を普通の著書として仕上げる場合にも、私は矢張り、この圖録形式を利用して、一方の説明の缺を一方の直觀の圖で補ふといふやうなやり方を採りたいと思ふて居る。それは、たゞに私の思索を出來るだけ全いがたで表現し得るといふばかりではなく、又、私の思索を自己體にも最も適合したやり方ではないかと思ふて居るからである。——茲に讀圖者の爲めに一言注意しておくが、圖は全體性、實在性を現はし、角は現實、三角は知識を現はして居るものと大體承知してをて見てもらひたい。(甲陽軍機に、孔明八陣圖のところ、この三形を以て相をとる有口傳とあるのが、偶然ではあるが、私には必然に思はれて面白かつた)——、それで、若し又、私がそうした著書の大體すらも完成することが出來ずに終るとしても、この圖録による家穠農乘學の大部分でも出來て、後來の君子に遺し得れば、それだけでも、私は私としては充分満足である。わからないと人はいふかも知れない、それならば又それでもいい、どうせトエフ

53

- ・ 圖の解釈の基礎
- ・ 円〔○〕 = 全体性、 四角〔□〕 = 現実、 三角〔▽〕 = 知識
- ・ 最深最高の教育的眼目は、「人類的精神」 = 「世界人類哲学」の啓發にあり。
- ・ 単なる智識、技能の習得は、教育正當に非ずして 教育テクノロジーである。
- ・ 狄嶺の教育哲学については、拙著 『場論的世界の構造—江渡狄嶺の哲学』の「第2章 狄嶺の教育哲学と方法論—『単校教育理念』の発見と『教育のコペルニクスの転回』を参照されたい。

エルストロツクの袋なんだから、黙つてそのまゝホエシュレツケ氏の整理に遺してもいゝ譯なのだ。全體、わかるとわからないとは餘り心配したことではないものである。誰れか眼前の一粒塵をもわかつたといひ切れ得るものぞ。人間に何よりも貴いことは、わかつたといふことよりはわからうとする不漸の努力である。

本輯はかゝる意圖の下に門庭施設としての圖録の第一輯順序である。この圖録全部の計畫は、大體總目次に示す通りであるが、第三部の農想と農道との論議圖録は、その分輯圖録は、その分輯の仕方が、未だ餘裕がなく、ハツキリと發表するだけの整理をし切れずに居る。然し、第二部の通三學理論の後年度課程のところ迄わかれれば、後は大體の見當がつく。通三學の部は、學としての私の農乘の樞紐核心をなすものである。特に、この場論、Feldologieは、今から十數年前、私の四十四、五歳の時、初めて発見した独自の理論だと思ふて居るところのもので、出来たら世界の學界に問ふて見たいと思ふて居る。問ふ問はんは別としても、私に、事にこれに専心し得る餘裕さへ恵まれたら、この場論だけは完成して見たいと思ふて居るが、今の状態では、到底それは不可能に近す。私がこの序文の最初にコペルニカスの轉回といつたのは、この場論のことである。この場論と行論とが、充分に理解がつかなくては、私の全體の農乘學大系の理解も結局不十分であり、皮相であるといつていゝ。それをアテズツボウの色眼鏡での擴張推量だけは眞平御免を蒙りたい。

場論に次いで私の學的野心のものは行論である。所謂行を説いて居る思想家、哲學者は、西洋に

も日本にも可成りあるやうだが、等しく未だ我が行論の門にも到らずの觀がある。この場論と行論とが互に獨立しながら、互に關聯して、組論のしらべと識法爲方論のすべによつて織りなされるものが、私の農乘學全體の理論趣向である。それに對しての具象現象的な、事據趣向は、農法と農道とによつて出来て居る家業、即ち農域の内外に營爲せられて居る業なるものと家なるものとの場（場論ではない）からの了見がそれである。茲に私の理論と實際とのピツクリとした徹底的な一致があり、天衣無縫といつてもいゝと思ふて居るがどうか。でそこで通三學のところまでわかればいゝのであるが、それ迄わからないとしても、そうした、一元一法で完盡するといふ仕組が私の建前であるのだからして、基本としての前年度課程第一節のところをスツカリするか、或は、この總序だけでも充分に噛みこなせば、その中には、農想農道ばかりではない、農乘の全體も含まれてあるのであるし、従て、一創全相のわからなければならぬ筈であるのである。尙ほ附ておくが、私は百姓だからその立場から凡て農といつて居るのだが、この考へ方は、何にも獨り農に限つたことではない、一般に通じて譯らず、悖らず、普遍妥當なものと思はれる信じて居る。だが、そうわからなければならぬといつても、それは、仲々そんなに簡單容易なことではないと思ふ。それで、目次にも示したやうな色々の課程圖録の簽證も必要になつて來るわけである。が然し、これとても凡てはこれで「決定」したものと思ふて居つてはならない。一切は「未済」の無盡無極の課題であるのである。未済が既済と相隣りして六十四卦八十四爻無数の生々開展をなすのが乾坤易の本體であ

・ 「場論」と「行論」の獨立と関連、そして「組論」から「農乘學全體」へ

・ 場論 = Feldologie (フェルドロジー)



るが、又、わが農學の模相、毒無盡の體用でもなければならぬ。それは、たしかに「絶対であるが而も相對的」「絕對だが然し不完全」である人間の提言たることは、誤解してはならぬ。従つて、この圓録も、今後不斷の改訂補綴は當然なされるであらうと思ふ。だが、今いつた根本の中心經濟の絕對な場からの河底には、最早や徒らに河清を待たなくてもいいだけの動きのないことは然に斷つておくことが出来る。それだけは天地が崩れても心配無用。

顧みるに、政治經濟を學んだ私が、三十の年、全く烟もがひの小作百姓生活に這入つてから茲に二十七屆滿、最初の四、五年の間は、經濟的には最も苦んだが、他人の借りものではあつたけれど思想的には實に氣なものであつた。その後の四、五年は、經濟的にはどうか食へるやうにはなつたが、思想的には、レデーメードの借りものゝ百姓至上概念がスツカリ打ちこはされ、私が、「百姓愛道場」と名づけての一つの集團生活の夢も醒めかゝり、最も惱み抜いた時代であつた。幾度か落葉抽枝、これでいゝとまとめて見たやうに思ふても、結局それは、本質的には、生活は生活、思想は思想である寄木細工の戯論に過ぎないのであり、實の河原の子供の石積みたやうなものであつた。丸で内面は散々の體であつた。而も、それ／＼の道には、すぐれたエライ人は決してないではないが、これ迄、誰れ一人として、生活と思想とを一元的に觀て、その破綻の烽火を通過してその人自身の生活思想を打ち立てた人はなかつたものであるから、何處にもこの私自身の苦惱を訴へてその救へを乞ふ所以はなかつた。長男の十歳を失つたのもこの時代であつた。實に、私にとつ

ての絶対絶命の危機であつた。ソシテ、四十屆に、どうにもかうにもやり切れなくなつた結果、せつぱつまつてフト感じたことは、――後から見ればコロンブスの卵のやうに何でもない拂波求水波是水ではあるが、――外から借りものゝ理窟や（敢て理窟といふ）相對的な考慮や、それ等一切の對論計較を抜きにした百姓生活そのものゝすがた、これは決して理窟なしに悪いものではないといふことであつた。（或る意味からいつて、これは凡夫徒生の、眞心觀に對する妄心觀の重大回轉に似通ふものとも見れば見られないこともない）一體、多少なりとも學問といふやうなものをしたものは、何にかに上將用心の理窟をつけたがる種族のあるのだが、然し、そうした理窟といふものは、ドンナにいゝ理窟であつても、蓋し算沙の昨是今非を免れないもので、最後の落ち付きといふものはないものである。又、そうでなくてはならないし、理窟や心としてはそれがいゝものなのである。それで、愚かにも、四十にして始めてこんな簡單な、理窟を抜きにした無戲論無礙の百姓生活を退歩廻照することを學ぶを知つた私は、同時に、最早や疑ふことの出来ない或る事實上の根柢を待たのであつた。私は今でも、自分でも貧乏しながら、而も勞貧四民の最たる百姓生活に、何物にも代へ難い感謝の念を持つて居るのは、若し私が、實際百姓で飯を食つて居らずに、それも窮乏の底に涙を以て飯を食つて居らずに、イージー・ゴイングに、或は學問の生活をして居るとか、或は社會にすつといゝ生活をして居るとかといふことであつたら、いくらどんなことをしても、到底この内からのことはわからなかつたであらうといふことである。で、それからの私の不斷の隱命の

「地涌のすがた」は、「百姓生活そのもののすがた」である。

「生活」と「思想」との一元論が、「場の哲学」である。

問題は、それならば、どうしてこの百姓生活から積極的ないゝものが生れて来るかと、直接に、一筋に、この自身の無謀向不思量底の百姓生活、私の今の言葉を以てする人的物的のいつはらざる組的事象である家稷を見きほむることであり、見きはめてゆく角力であつた、これがそも／＼の今日の一切のつくはぐの借りものを脱いだ、<sup>以て</sup>な私を生み出した第一歩の發足點なのである。借りものはドンナに美しいものでも借りものは矢張り借りものなのである。敵れたる襦袢を衣て居るからといつて、自分のものでさへあつたら狐貉を衣て居るものと立つて何等の恥ぢる必要はない、況んや父母所生本来のこの清淨な菩提身をや。只だ、自分のものだからといつて、汚つきけがれて人に穢を失するやうなことがあつてはいけぬ。ハダカでも亦道中もなるまい。そのみか注意すべき點だ。これが、私の家稷農乘學の考への（或は私の知識論の）第一の極めて大事なクニステオ。フアクチス、事據約束なのである、その間に「或る百姓の家」と「土と心とを耕しつゝ」との二つの著書を、知人の切なるすゝめで止むを得ず書いたが、それは未だこのところをハッキリせない時に書いたものだから、誠に冷汗ものである。然し、今日に達する道程のものとして見てもらへれば、必ずしも益なきものでもなからう。兎に角絶版になつて居るからいゝ。アメリカにも、鮮満にも知人の厚意で遊ばせてもらつたのもその頃である、「建設者」といふ民族の自覺に立つた三號雜誌を出したりもした。かくて、闇夜の四、五年を積み抜いた私の百姓生活の考へ方も漸くに東の方に一縷の曙光を見出した。が、それも一、二年の間でまたもやスツカリ明るくなる前の一時の暗が覆ふて

58

來た。それは、そうした一箇の生活、——家稷（前に例した凡夫往生といふ見方からいへば機中心の建前）を見極むるといふことは、常人としては必ずいゝことにちがひないし、又、間違ひもないことだとしても、それを普通妥當として可能ならしむる理論的根據は果して如何。それからしての一全體余分な充足した結構は如何、つまり、自分の衣だからといつて、汚つきけがれて居つたものではよくないだらうし、暑さ寒さも充分防げないやうなものでもよくはないではないかといふ疑問なのである。尤もな疑問だ。これに私は又、暫く顧みられた。ソシテ、偶然にも、前にもいつたやうに、四十四、五歳の頃、物理学と数学との暗示から「場」といふ考へ方の導入を、電光の如く感得したのである。これだなと思つた。その時の喜びは實に何ともいはれなかつた。四十四、五年、不斷の精進をつゞけて來たこの東方の一族客の魂が、漸くにして茲に最後の理事眞俗、生活思想、形式費料、所謂無爲法有爲是として、共に播きのなき大磐石の地に到着したのである。飛ぶかしないことだが、言葉や悟り心では、とうの昔にわかかつて居つた管の脚下の大地も、ホントにわかかつて立ち得たのは、この時が始めてなのである。これが喜ばれずには何が喜ばれやう。ヘーゲルは、思惟をその複雑性に於て、而して同時にそれを客觀的、具體的なものとしてアウフアツセンする迄には長い間の年月を要したといつて居るが、私の経験も亦然りであつたといつていゝ。これは實にホントに人生を生きる人には大事なことだ。それからは、私は最早や、一切に何等の疑ふところなく文字通り決定智に入つた。茲に立つて顧みる時、過去の自分もそうであつたが、世間には、或は西

59

・物理学と数学との暗示から、電光の如く感得し、「場」の考え方を導入した。 ・「家稷」（生活の組的事象）の探究が、「家稷農乘學」である。

洋市場に、或は東洋市場に、或は卸商に、或は小賣商に、何と古着買ひの、借りもの探しのさるものまねのエラガリの假裝行列の多きことよ。實に突止千萬の至りである。色々の知識や、思想や、又、その寄木細工を知つたからとて、それは單に物知りとなつたといふだけで、其處から決して獨創なものを生じて來るものではない。獨創なものは、新しい鍵を見出し、そして、過去の知識を断つ力であらねばならぬ。(この言葉の大意はマルクスのいつて居るところであるが、マルクスはたしかにその一つの鍵を見つけ、それから又實に科學的に論證してゐることは甚だ敬服に値ひすが、然し惜しむらくは、それは、握へることもいみじくあつたが、開違ひも欠張りいみじくあつた)。それで、この「場」の次位的那處に於ける In field of 考へ方から家業を見る時、それは、家業といふ制約せられてある事象のまゝで、「家業なるもの」として標型にありて考へられ、そこに始めて明瞭に、普遍妥當な理據が見出され、方法的には、科學的な事象の「純粹培養」が遂行せらるゝのである。この場の標型に於ての、而も、その場が事象、行域、業域である當然の結果として、那標の標型に於ての考へ方は、明瞭暗頭一切の問題に等用適用せられて些の礙りがない。左右實にその原に逢ふ無限の妙味があると私は獨りだかも知らぬが思ふて居るのである。それで、この場の純理的又は實理的な開明を私は場論 Fieldologie と名づけ、それは、私の家業農乘學のクエスチオ、ユリス理據約束をなすものなのである。ソシテ、こゝに立つてその農乘學の諸論、特に爲方論としてのまとめ方解方の識法理論に、私として又ひそかに大方の諸君子に問ひたいものを持つて居る。かくて、

この場のハツキリとした考へ方を、私は、古今東西に無等な勝義と敢ていふが、(プラトンのテイマイオスにある場所の概念とは全然何等關係はないし、それは又、私の場論の始めから終り迄の考への進め方を知れば自ら首肯されるであらうと思ふ)、それは又、私の場論の始めから終り迄の私の獨斷の心であらうか。寧ろ、私は、何人もニュートンが *Methodus non iunctio* といつたやうな獨斷偏見でない眞の自覺を持つことはかくありたいとさへ思ふて居る位である。若し幸にして私にこの完成が出來たら、私は唯だ後世幾百年の具眼者にその公正な批判を委すのみである。百世以俟聖人而不惑とは私の今の確信である。この場論の考へと相前後して、私は、「行」のホントに正しい究竟な、本質的な考へ方を、又、實際の百姓生活から靜物畫に思ひ當るところがあつて教へられ、かくて、業、學、道の三つが、他の何物をも併りることなく、又、それらの何物にも一切因はるゝことなく、露堂々と直に、私共の日常生活そのものゝ内局に、徹底一元的に理解せられて二義無きことが出來たのである。只だ然しながら、久しく身學問の正道を知らずして心學問の迷妄にわざあひされ來つた私は、積習未だ身形の調直を得ず、この際、この一事は、後の前道の人のよく／＼誤らざらんことを望む次第である。又、私が、道元禪師を自分自身で獨りで眞に味讀することの出來たのもその頃のことである。この三、四年來は、又その行論の當然な發展として「體」格論、菩提、身論といふことを考へて居る。かくてそれ以後、私の歩みは、只だこの一義一行のフイロゾフイーレンとその深化擴大にしか過ぎない。ソシテ、この場の事理からして、大體の自全充足

- ・ 「場所」の概念から出立する西田哲学を超えた狄嶺の「場論」
- ・ マルクスを超えんとする「家業農乘學」の創造
- ・ 「獨創なものは、新しい鍵を見出し、そして、過去の知識を断つ力であらねばならぬ。」 (p60、参照)
- ・ 狄嶺と西田哲学については、拙著 『場論的世界の構造—江渡狄嶺の哲学』の「第1章」の「7 農想論—『場』の哲学の核心」 (p43) および「第4章」の「8 狄嶺の西田哲学批判」 (pp175~177) を参照されたい。
- ・ 狄嶺と西田とが対面したことについては、拙著 『場論的世界の構造—江渡狄嶺の哲学』の「第3章」の「3 西田幾多郎と江渡狄嶺の対面」 (pp116~118) を参照されたい。

な家稷農乘の骨組みの出来たのは、五十に近い頃であつた。孔子は、四十五而無聞焉亦不足畏而已といつて居るが、聞と無聞とは私の關するところではないけれども、四十五は矢張り人間の收穫期であるかも知れない。然し、今、行の立場に立つて居る私は、この孔子の言葉を一廻り切りつめて三十四十としたい。ソッチ、男の働き盛りといはるゝ四十代には、何の不安も、疑ふこともなく、あらゆる方面に、借りものゝ自己でないすがたで、ウント働き抜いてもらひたい。それには、私のやうに、長い間長者の弟子のやうな無駄足をして、いざこれからこそホントの働きも出来るとし、したいと思ふた時には既に人生の定齡五十を過ぎて居るといふやうなことではないことを望みたい。これには矢張り、私としては、どうしても、この不動な「場の基礎」を入々が明確に把握することは絶対に肝要であると思ふ。これは、私の「後に来る」人達への切々たる志願である。私のがい経験からの哀々たる願望である。それで、その全體の骨組といふものゝ更らに要約縮小したのは、私の例の曼荼羅、Agrayana Mandrus 綜観會圖の一葉である。或る意味からいへば、もうこれで、私だけは、今日死んでもいいそれだけ、後何年生きてもいいそれだけ、又、死んだ後でもいいそれだけ、畢竟只だいいそれだけ、このいゝそれだけ以外に、何の所求も増減も腐敗も私だけにはない。路石の如くもありても、*Es ist* (Es) と *Canst* がその死の床でいつたのははげえまじし。

そして、このいゝそれだけの無所求、無所厭、無所慮の寂定裏から、今の私は只だ若衆生虚空不

可患、我願亦不可盡、死んでも息まないこの家稷農乘學の完成組織に、刻々永遠の證上の修を修しもて行つて居る。若能心不妄精選無有涯、——私は、心から、かのあらゆる作品を宇宙の極盡と共に未完成に達した偉大なレオナルド、グ・ビンチの魂をめでいつくしみつゝ、又、ゲーテのフアウストが、そのウルンフアウストの着手から死の前年の完成に至る迄、實に半世期の長年月を積み出したことの尊さを敬慕しながら。

私が、かく、漸くに、私自身のものとして、安んじて世に贈り出し得た最初のもの、實にこの講義案の圖録であるといつてもいい。これは無論、著書の體裁を備へたものではなく、前にもいつたやうに、牛欄寮の素案に語る手引きと、更らに避んでの具體的な研究とその方針とを示す底本たると同時に、私のその覺書、手控たるに過ぎないやうなものであるから、御覽の通り、形の上では、極めて貧弱單純なものである。然し、入一微塵轉大法輪、拈一葉神建寶王刹といふこともある。そのものゝ内容は、必ずしも形の上の大小とはかゝはり合ひのないものである。一小原子内の構造と幾億萬光年の廣袤を有する全宇宙の構造と、果して、いづれを大いづれを小とすべきであらうか。只だ、以凡眼觀、以凡情念する時、原子は極微で、宇宙は極大といふに過ぎないのである。私共は、先づかゝる俗見は打破すべきである。本圖録の全體は無論だが、よしどの一頁でもいゝ、ホントにわかつてもらへる人には、そこには、業の家稷から出發して、而も、世界全體の法人刹の開會創生が看取されないとはいはれない。結局、本巻總目次にある各帳は、この總序一部一葉の濶狀的な展

- ・ 「家稷農乘學」の骨組みが、狄嶺の 曼荼羅圖 「Agrayana Orbis Mandrus」である。
- ・ ここには、レオナルド・ダ・ヴィンチとゲーテの創造力に学んだ狄嶺の獨創的世界がある。
- ・ この狄嶺の 曼荼羅圖 は 江渡狄嶺著 『地涌のすがた』 に収載されている。
- ・ この曼荼羅圖の「拡大印刷版」が、拙著『場論的世界の構造—江渡狄嶺の哲学』のカバーの裏面に収録されている。

開にか過ぎないのである。それが、私の建前である。尙ほ、編録の後にある農乘囑文の一千二百餘字は、牛欄齋衆に、行學の正儀を示す爲めに書いたものであるが、同時に、それは私の遺文であるといつていい。多少遠慮して、あらゆら方面とはいはないが、私は、百姓の行學の上では、嘗て未だこれだけのものは書けてないと、謙虚な心で、而も自信を以て敢て公言する。若しこれを神宗に求めたり、差し當り、道元禪師の普觀坐禪儀ともいふべきものであらうか。が、私の野心は更らに、それから一步を前進した私共のものであつた。私の力足らずして、それを達したか達しなかつたかは、看る人の自由だが、志願は實に其處にあつた。かくいふを、千萬人の首肯者は笑ふもいゝが、一人位いの具眼者の看取があつてもいいと思ふ。その中には、萬象を一盤頭に括來して、科學哲學から政治經濟に至る迄、又、日本の經域から世界のマクスロビツクな方向の理解の私共の態度までをも、一言一句に道着しておいた頼りである。農乘界内無時時、誰れか家裏を小として、天下國家を大なりとする。君子不出家而致於國、禮記郷飲酒義篇には、吾郷於郷而知王道之易々也と、古への大人の學はこれを開述はなかつた。只今の大任、政治家の理り知りたるだけであるし、又、一般の庶人はその自分の脚下の見方を知らないものである。よくもよくも上下共にあぐらや一つの揃つたものである。これだけは感心だ。この囑文の註釋は遺つて出したと思つて居る、かくて、圖録の大體が完成したら、記述の勞作にもとりかゝりたいと思ふて居るが、望みは徒らに大にして、力は左程足らないと思ふて居らぬが、殆ど餘裕のない事情にあることを遺憾とする。而も

64

これ我が私としての遺憾とするのではない、我が半生を捧げて來た百姓その人達の爲めに遺憾とするのである。

終りに、本圖録は、どうせ賣りものにはならないから、牛欄齋だけのテキストとし、極めて小部數に限定して、非賣品にして出さうと思ふてあつたが、世の中には、妙に氣まぐれな人間もあるもので、たまには私の話を聞きたがる人もあり、それらの人達の便宜をも考へて定價を附することにした。定價は大體實費の五割増し位ゐるに居るが、私の方から只やる人もあり、又、そうでない人も只だもらつていゝ氣で居る人も多ので、出版費用の持ち合せもない貧乏な私は、やりくり算段をして出すのだが、出す毎にいつも、五割増し位ゐるが五割足し位ゐるの損ばかりすることになつて居る。損して得とれで、貧乏の上ぬりは、私だけは色上げが出來て未だいゝが、出したと思ふて居る次の出版が、それで出來にくゝなるのは少しく困ることである。それも、私自身のことであらば、商賣でないんだから一向かまわぬが、私自身のことではなく、私は、私が學家同事して盡心して來た百姓の爲めのことだと思ふて居るので、何とも困ることになるのである。愚癡のやうだが、それで、この際思ひ切つてそのことだけは一言して置く。尙ほ、本冊子を世に贈るに當つて、私が前に述べたやうな今日の土臺、骨組を仕上げかけてやつた十數年の以前から、私同様貧しく而も病氣でありながら、その養生の費用を節してまでも私に寄せてくれた涙ぐましい厚意の持主、實に、貧者の一燈とも感謝すべき、私の一生忘れられない弟のやうにも思ふて居る友の一人、

65

- ・ 「農乘囑文」に、「行(ぎょう)の正儀」を示した。(p64、参照)
- ・ この遺文「農乘囑文」の「原文」と「書き下し文」は、江渡狄嶺著『地涌のすがた』に収載されている。
- ・ 『地涌のすがた』からの「農乘囑文」の「原文」は、和田耕作著『場論的世界の構造—江渡狄嶺の哲学』に収録(影印版)されている。

金澤藩さんに、この際心からなる謝意を致すと共に、この圖録を先づ君に贈つて、何よりも同君に喜んでもらひたい。今日この私自身の圖録の出来たのも、その一半の功は實に同君にあるといはなくてはならない。その外、本書その他の出版については、私の心の故郷たる信州に於ける清澤芳郎さんその御道伴の人々の厚意に負ふところも亦少くない。併せて感謝の意を表する。

序の筆を擱くに當りて、我が郷土の生み、我が國土の日本に於て、我が最も尊敬する一人である故陸羯南先生の「韻筆」の歌、

眞弓にも征矢にもかへてとる筆の

あとにや我は引返すへき

の筆の一字を鐵にもぢり更へて

眞弓にも征矢にもかへてとる鐵の

あとにや我は引返すへき

66

### 三、私の信州に於ける提話筆記二篇

はし が き

この二篇の中、前者は講義案の櫻井近藤さんの筆記、後者は、曼茶羅の清澤芳郎さんの筆記である。

私は、學者でも講師でもないから、私の話は、講義でも講話でもなく、無論、説教でもなく、提唱でもない。或る人は私の話し振りを提話といつた。成程うまいといつたものだと思ふた。私はアノ提唱風なものひ方はキラヒだ。「ウウ、こゝはやつて見ればわからぬ」といふことには異存はないが、それならば始めから話さぬがいゝだらう、ウナリの連続のやうなホモ・サビエンス的提唱ではウツチもウナリたくなる。話すならば、何處迄も徹底的に話してわかるやうにといふのがその根本條件でなければならぬ。然し、理の高じたは非の一倍といふ謬もある通り、純客觀的なものは兎に角、その人を離れ、その人の行や、生活を離れては到底わかり得ないやうな人の思想や話しは、その人の一切が言葉で語る何物かを抜きにして、單に論理や數量では現はし切れない何物かだ、其處には當然あるべき筈だ。だから、純講義風でもそうした話は駄目であらう。

67

・ p66、一行目 上から「金井浩さんに、」  
・ 郷土青森県の先覚者・ 陸羯南（1857～1907）を敬慕する 江渡狄 額

・ 【出典：江渡狄額著『地涌のすがた』、昭和14年、青年書房刊】

・ 【和田文庫蔵本より】

・ PHN（思想・人間・自然）第50号、

2021年12月28日 PHNの会 発行

・ 【PHNの会・和田耕作（C）、無断転載厳禁】